

《修士論文要旨》

「神社の空間構成からみた現代宗教の地理学的研究」

小 林 遼*

従来、日本の宗教とは土地に根付く精霊信仰が主であった。また祖先崇拜を軸としたシャーマニズムや山岳信仰もみられた。古代宗教の在り方は現在において、どのように残り、どのようなかたちで表現されているのだろうか。

歴史的な流れをみると、古代の山や大地をカミとし崇めてきた信仰は、仏教や儒教、陰陽道といった外来の宗教との習合を経て日本独自の形成を展開してきた。江戸後期以降は大本教など復古神道の普及や明治維新後の国教化制定の流れから神仏分離が展開され、ナショナリズムと国家神道の在り方が常々問われてきたのである。

このような変遷の中で従来あった宗教は次第にその在り方を時代に合わせていかざるを得なくなったのである。現在ではどうであろうか。今日の宗教はむしろ個人や宗教団体を中心とした社会組織が多くみられ、従来あったような宗教形態は変容しつつある。聖域である神体山は純粋な信仰の対象としてだけでなく、一般観光客の参拝も認められ俗化し神社では神の御利益が売買されている側面もみられる。どのように空間的に表現されているのかという所に筆者は関心をもっている。それが空間的に縮約されているのが神社である。その中でも伏見を一つの例として取り上げたい。伏見稲荷が、時代の流れにどのように神社の空間関係を変化していったのか。それを明らかにすることが本研究の目的である。

調査方法として、現地調査を主として伏見稲荷神社を中心に稲荷山、社格、商業施設を巡った。その中で神社の参拝客がどのような層であったかということに注目し、寄進者リストや千本鳥居を得て集計した。データとしては都道府県別に区分し、また稲荷信仰が強く根付いた地域では市町村ごとに区分したものを表にまとめた。